

く どう よ し ふみ
工 藤 与 志 文

学位の種類 博士(教育学)
学位記番号 教第72号
学位授与年月日 平成8年3月21日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項目該当

学位論文題目 文章読解における「信念依存型誤読」の生起とその低減に
関する研究
—科学領域に関する説明文を用いて—

論文審査委員 (主査)
教授 細谷 純 教授 小松 教之
教授 菊池 武剋

論文内容の要旨

科学領域に関する説明的文章には、読み手の既有知識と矛盾する内容が含まれることが多い。このような文書の読解過程において、知識の存在が、文章の正確な読み取りを妨害し、誤読を引き起こしてしまふことがある。本研究はこのような誤読(既有知識依存型誤読)に焦点をあて、読解過程における既有知識依存型誤読の生起を具体的に追求するとともに、その生起を低減するための方策として「ルール教示」を取り上げ、その効果を検証することを目的としたものである。

本論文は、3部構成である。第1部では、本研究の問題の所在を明らかにした。第1章では、学習過程と既有知識との関係に関する従来の研究を概観し、本研究の問題意識の背景について述べた。第2章では、読解における既有知識の役割を正當に評価するために、「読解のコミュニケーションモデル」を提唱した。文書読解を文章の書き手と読み手の記号を介したコミュニケーションととらえるこのモデルは、読み手の既有知識と文章の伝達内容との「交渉」を読解過程に含めて考えることを可能にするものである。さらに、記号を媒介としたコミュニケーションを研究する「記号論」の概念を援用することにより、この「交渉」が生じる過程を、読解の統語論的、意味論的、実用論的レベルのうちの実用論的レベルに相当するものと位置づけた。このような

「概念装置」によって、読解に及ぼす既有知識の影響を読解過程の各レベルごとに検討することが可能となる。第2章は、上述のモデルとそこから派生する概念装置の解説に当てられている。

第2部は、第1部で展開された「問題」に一定の回答を与えるべく計画された一連の実験について述べた。本研究では、既有知識として「ヒマワリの花が太陽の方を向いて回る」という信念（回転説）を取り上げた。したがって、対象とする「既有知識依存型誤読」は、特に「信念依存型誤読（Belief-Dependent Misreading：BDM）」と呼称されるべきものである。第3章では、実験1について報告した。実験1は回転説を信じている人に回転説を否定する内容をもつ文章を読ませるという条件を設定し、BDMの生起と読解レベルとの関連を検討したものである。実験1によって、読解の3つのレベルのいずれにおいてもBDMが生起すること、実用論的レベルで最も生起頻度が高いことが明らかとなった。第4章で報告される実験2では、実験1で確認されたBDMが主として文章側の要因で引き起こされたものであり、回転説の存在によって生じたものではないという可能性を検討するために、実験1の文章と同じトピックを扱いながらも、より簡略化された文章を用意し、その読解過程においてもBDMが生起することを確認するとともに、光合成ルール教示がBDMの生起を低減させる可能性を探った。その結果、実験2でもBDMの生起が確認されたことから、実験1で認められたBDMが文章側の要因で引き起こされたものではなく、回転説の存在によるものであることが結論づけられた。しかし、BDMの生起率そのものが実験1に比べて低かったため、ルール教示の効果を十分に検討することはできなかった。第5章で報告する実験3では、文章内容の受容に対する「抵抗」反応がルール教示条件で少なかったという実験2の結果を受けて、文章の内容に対する認知反応の生起にルール教示が影響を及ぼさうかどうかを検討した。その結果、ルール教示要因と認知反応の間に統計的に有意ではないものの、予想と一致した傾向が確認されるとともに、BDMの生起と認知反応との間に一定の関係がみつかったことから、ルール教示がBDMの生起の低減に効果的である可能性が間接的に示された。そこで第6章で報告する実験4では、簡略化した文章ではなく、実験1で用いたオリジナルの文章を読解させる条件を設定し、BDMの生起頻度が最も高くなると予想される状況でのルール教示の効果を検討することで、実験2・3では明瞭に示しえなかったルール教示の効果について、一定の結論を導くことを目指した。その結果、ルール教示によってBDMの生起頻度が低減することが確かめられた。

第3部は「全体論的討論」である。第7章では、これまで報告された4つの実験の結果を概観し、「二重ルールのシステム論」にもとづいた実験結果の解釈を試みるとともに、特に実用論的レベルにおける「ルール」のはたす機能について論じた。第8章では、本研究で得られた結果が教科教育研究に対していかなる「意義」を持ちうるかという問題を、特に言語教育研究と科学教育研究との関係に置いて詳述した。言語教育研究に関する議論では、特に読解のコミュニケーシ

ョンモデルの導入による読解指導目標の拡大が論じられた。また、科学教育研究との関係では、本研究の結果とこれまでの組み換え型ストラテジー研究の結果との比較が行われ、教授ストラテジー論に与える本研究の意義が論じられた。第9章では、今後の問題、特に本研究において十分に追求できなかった問題と本研究の結果から新たに「発見」された問題について述べた。

論文審査結果の要旨

本研究は、科学領域に関する説明文を用いて、「読解のコミュニケーションモデル」の提唱のもとで、文章読解における「信念依存型誤読」の生起とその低減に関するものであって、中心的仮説は、1. 既有知識と矛盾する文章の読解において、信念依存型誤読の生起が確認されるだろう。特に、統語論的レベル、意味論的レベルに比して、実用論的レベルにおいて、生起率が最も高くなるであろう。2. ルール教示によって信念依存型誤読の生起率が低減するだろう、というものであった。この仮説の詳細な検証の為に、一群の実験が行われ、「読解のコミュニケーションモデル」の妥当性、有効性をも明らかにしつつ、仮説の検証に成功している。統語論的及び意味論的レベルでの達成は、必ずしも実用論的レベルでの達成を意味するものではなく、そのための必要条件であることが明らかにされた事、「ルール教示」が意味論的レベルでの達成者に実用論的レベルでの達成を保証する働きをもつ事が明らかにされた。これらの事柄は、科学的文章読解の指導において、指導目標の設定や、その目標実現の為の指導法の選択決定にとって、重要な示唆を与えるものといえよう。

本研究は上記の実証的研究にあわせて、その結果もふまえながら、「二重ルールシステム論」を展開し、上記の仮説2における「ルール教示」の働きのメカニズムについて論述する。この論述は、一見事後的に既に遂行された一群の実験結果を解釈しているにすぎないようにも見えるが、その実、きわめて前向きに、新しい問題の発見・創造に役立っていることがいえる。

筆者は、上述した実験的知見と、それをふまえた「二重ルールシステム論」を背景にしながら、本研究が「教科教育研究」に持つ意義を論じている。第一に、言語教育研究に対する意義として、「読解」概念の拡張と「読解」指導目標の拡大を挙げている。いずれも、読解における実用論的レベルと関係する事柄であり、論述は妥当であり、かつ有効的である。第二に科学教育研究に対する意義として、教授ストラテジーに関する理論に一石を投じている。科学的知識を「文章読解」というプロセスを経て入手する機会は多く、このような機会を提供する側としては、読み手の「信念依存型誤読」を予測し、その生起を低減する為の対策をこうしておく必要性が強調されることになる。本研究に示される具体的提案は、今後の教授ストラテジー研究にとって、十分に傾

聴に値するものである。

勿論、今後に残された問題も少なくはない。1. 読解レベルの測度の妥当性の検討, 2. 測定値の有用性(基準関連妥当性)の吟味, 3. 測定値の有意味性(構成概念妥当性)の吟味などが挙げられるが、いずれも筆者において明確に自覚されており、今後の研究が期待される。

以上を通して、本研究は、文章読解の研究から端を発しながら、教育心理学研究の中核というべき教授-学習過程の研究に、大きな貢献を示しているといえる。

よって、博士(教育学)の学位を授与するに適當である。